

ちいさな手

世界に派遣される教会を訪ねる。

MtS(ミッション・トゥ・シーフェアラーズ)訪問記



日本聖公会は毎年海の日に近い主日を海の主日として記念し、MtS (Mission to Seafarers 《ミッション・トゥ・シー・フェアラーズ》) の働きを覚えて、信施を献げています。しかし、お祈りはしているものの、日本聖公会に連なる信徒一人ひとりに MtS の働きがどんな意味を持っており、教会がどうして船員たちの福祉と霊的ケアに関心を示す必要があるかに関してはあまり知られていないのが現状だと思います。今年の7月10日(水)社

会委員会のメンバで MtS の活動見学を実施しましたが、今回の訪問は横浜教区社会委員会として MtS の働きを理解し、どのような方法でその働きを支えることができるのかを模索するためのものでありました。

出発前日の MtS チャプレンのサイモン盧^{とくしゅせい}^{やくどうかん}司祭から説明がありましたが、その中で「当日になってみなければどんな船が港に入ってくるのか知らないため、船の訪問は毎日が新しい」という言葉が印象深かったです。MtS ミニストリーの特殊性と躍動感が良く伝わってきました。

普段 MtS で船を訪問するときは一日に5、6隻^{せき}程度の船を訪問するとのことでしたが、今回は見学の次元での訪問でしたので2隻^{せき}の船を訪問いたしました。最初に訪問した船は TARAGO という車やコンテナなどを運送するとても大きな船でした。最初船に着いた時、まずは船の大きさに圧倒されるような気持ちでした。説明では聞いていたものの、想像していた以上に大きな船で乗るだけでも少しドキドキしました。何よりも印象的だったのが船員たちの反応でした。私たちが喜びを持って歓迎してくださった船員たちの笑顔に言葉が十分に通じなくても気持ちが通じるような気持ちでした。チャプレンのサイモン司祭の説明によると、船員たちの普段何の理解関係がない人たちと対話する機会が少なく、普通に会話する相手がいるだけでとても喜ぶとのことでした。また、船員たちがとても忙しく働いていることもとても印象的でしたが、これもサイモン司祭の説明によると、最近は増々船の停泊時間^{ていはく}が短くなっており、10時間から12時間程度で船が港から離れるため、船員たちが休む時間も日々減っている状況であるとのことでした。

二隻目の船は一隻目の船よりは少し小さい日本籍の KYOWA ORCHID という船を訪問しました。この船はコンテナを運ぶ船で、ここでもやはり船員たちは笑顔を持って私たちが温かく迎えてくださいました。いろいろ自分の仕事や家族についてお話するときの船員たちの表情はとても明るかつ

たのですが、子どもがいるのに何か月も家に帰れず、子どもの顔を見ることもできない環境は船員たちにはとても大きな心の負担になっているとのことでした。また、このような環境が船員たちが自分の街ですら異邦人になってしまう原因を作っているとの話も聞きました。

その後、アメリカ人船員たちのための施設から始まって今は一般人も訪ねている USS シーメンスクラブで昼食を共にしながら船の訪問を振り返りました。その中で MtS の働きについてより詳しい説明と共に、これからの MtS のミニストリーのためのお願いがありました。特に印象的だったのは、「MtS の未来のためにはボランティアをどれほど確保できるかにかかっているか」とのこと、そして教区の方からもこれが MtS だけの働きだけではなく、教会として積極的にかかわらなければならない、教会の牧会であるとのことでした。

今回の船の訪問は今まで遠くに感じていた船員と MtS の働きを身近に感じるきっかけになったと思います。特に言葉だけで聞いていた船員たちの現実に直接触れ、彼らが経験している苦勞と悩み、そして諸問題に対して少しでも感じることができました。すべてを尽くして神を愛すると共に隣人を自分自身のように愛することこそが最も大切な掟であるとイエスは教えているが、横浜教区のパリッシュに毎日のように出入りし、私たちの日曜生活のために働いている最も大切な隣人である船員たちを忘れてはいけないし、彼らのために横浜教区も絶えず祈り、関心を持って必要な支えを提供しなければならないと感じました。

(社会委員：司祭 テモテ ^{かんあきとし} 姜暁俊)

寄付のお願い

MtS 横浜では随時船員たちへの寄付を募っています。

- 靴下
- タオル (夏)
- 帽子 (冬)
- 手袋

<送り先>

〒231-0862 神奈川県横浜市中区山手町235番地 横浜クライスト・チャーチ

『MtS (Mission to Seafarers) 横浜』

面会支援ボランティア報告

この支援活動に参加させていただいていく時、いつも、思わされていますことは日本キリスト教協議会の「難民・移住労働者問題キリスト教連絡会」(難キ連)と、そのスタッフの方々が、そこに収容されている方々を絶えず覚え、祈り、働かれておられることへ敬服の念を抱かされていくことです。

長い間、難キ連の事務局のお務めをされていた佐藤直子氏には、その度毎に頭の下がる思いをさせられています。本当に取り組めば、取り組むほど、ますます、得体のしれない“暗闇”のように思えてくる、日本の難民や移住労働者に対する政策を前にして・・・そこに身を置きながら、既に収容されてしまっている姉妹兄弟の最もそば近くに寄り添われながら・・・いっしょに歩かれ、その方々の人権(人が、人として、人らしく生き、生活していくため)を何よりも丁寧^{ていねい}にいたわるようにして・・・ある時には、決してその暗闇に臆することなく、ひるむことなく立ち向かい、問題を提起していく・・・そして、その人たちの抱えている具体的な課題のひとつひとつに向き合い、取り組まれ、お応えしていく、大切になさっているお姿にです！まさに被収容者のおひとりお一人の中におられるイエスさまにお仕えしていかれるようにです！

そのような難キ連のお仕事に・・・連ねられ、被収容者に面接室でお会いし、今その方たちの置

かかれている事柄をお聞きしていき、聞き取ることでできたことをメモにしていく・・・というほんの少しの、わずかなことですが・・・いっしょにさせていただいていくというのが、面会支援という働きのことです。

今の牛久收容所におられる方の多くは、長期に渡る收容所での生活を余儀なくされ、精神的にも、肉体的にも疲弊されています。何回も繰り返し、難民申請をされても、何度も突き返され・・・、やっと仮放免ということになり出所することになりましても、ほとんど再收容ということで戻されていくという中にあります。そのような中で、いったいこのような生活をどれだけ強いられていくのか、全く見通しのつかない、混沌の中で、やりきれない・・・という理不尽な中で、すっかり希望をうばわれていく中におられます。

牛久收容所は、非常に辺鄙なところに建てられており、交通がひどく不便なところにあります。日本に家族や友達の方が、おられましても・・・面会に来られることは、なかなか難しい・・・電話で声を聞くだけ・・・いろいろお話ししたくても電話代に限りがあるので・・・という中であって、孤独にされていきます。家族の方たちも、どんな不安ややりきれない気持ちの中におられることと思わされます。

佐藤さんは、「面会支援は、被收容者の心の癒しがまずもって一番の目的です。彼女ら、彼らの心が癒され、これからの人生により良い選択ができますよう祈りつつ、その人たちの声に耳を傾けていただけましたら 幸いです。」「どうぞ、面会の最後には、その方といっしょに、お祈りをしてあげてください」とおっしゃられていました。

聞き取り終わると、その方々には、これからも、まだまだ続いているそれらの闇が、こちら側にまで、重くのしかかってくるような、やるせない気持ちでいっぱいさせられていきました。

(司祭 マルコ ^{たかだまこと} 高田 眞)

外国人被收容者面会支援活動に対するお知らせ

長年、「難民・移住労働者問題キリスト教連絡会」(難キ連)の事務局で務めてくださった佐藤直子氏は8月を持ちまして難キ連を退職されました。今後、面会支援活動は教区の社会委員会主催になり、佐藤直子氏はコーディネーターとして加えられます。活動の内容は変わりませんが、寄付を考への方は社会委員会までご相談ください。

○金券(商品券、ギフト券、図書券、図書カード、株主優待券など)、○はがき・便箋・封筒類
○文房具類 ○石鹸 ○シャンプー・リンス ○歯ブラシ・歯磨き粉

寿町プロジェクトからの報告とお願い

何時も変わらぬ暖かい援助を寿町の老齢化した孤独な生活者の為に頂き有難うございます。^{あいごと}

現在、寿町の300メートル四方の中に在る大小125軒の簡易宿泊所には5800人の人達が、一日当たり1000～1500円の畳み三畳の部屋(トイレ、シャワールーム、調理場は共有)に生活保護を受けて住まっています。その孤独な生活者の人達が生きて行く為に最低必要な物、衣類と日用品それにお米に絞って、このプロジェクトは援助活動を続けてきました。



その細かい献品内容については四季毎に『横浜の寿町の生活者への支援の報告とお願い』で各教会へお願いをしていますが、それもこの10月号で60回目となりました。期間にすると丁度^{ちょうど}15年になります。私達が献品している衣類、日用品などは毎月第一木曜日に寿町の中央にある「寿公園」で一品100～300円で販売されています。(無料にすると全部持って行かれるので)。また、衣類と共にお米は夜回りのおにぎりや炊き出しに使われています。添付の写真は、畳三畳の部屋と、私達の献品に集まる寿公園バザーのナップです。

振り返ってみると、事前の一年間のテスト期間を経て、遠藤^{ただ}主教のアドバイスを頂き、担当教会として横浜聖アンデレ教会、横浜山手聖公会、藤沢聖マルコ教会、鎌倉聖ミカエル教会の四教会で始まりました。更に聖公会は現地に拠点を持っていないので現在は日本基督教団の『寿地区センター』と協働して活動しています。その上に寿町で全体を仕切っている横浜市寿地区対策担当事務所と定期的に話し合い情報、アドバイスを頂き方向性の確認をしています。

このプロジェクトを進めていて、この15年間限定したアイテムの献品数、量が毎年ほとんど変わらずに続いていること、それにお会いした事も無い函館から大阪迄の間の方々から横浜教区のホームページを見たからとか、話しを聞いたからと言って献品・献金をして下さる方々も絶えません。何とも言えない大きな感謝です。

SEE・THINK PLAN・DO CHECKという言葉があります。兎に角、現場に立って見て考える、対応策を考えて実行する、その事がお役に立っているか喜ばれているかを確認する。これ等の事をプロジェクトメンバーで考えながら、また横浜市に確認しながらの15年でした。いろいろ社会的な問題もあるでしょうが、高齢化が進む中、寿町の生活者は簡単にはくならないでしょう。



どうか彼らを、老父だったら、夫だったらと考えてこれからもお祈りと共にご協力を宜しくお願いを致します。

(横浜教区寿町プロジェクト ヨセフ^{なかはらいと}中原禮人)

社会委員ニュースレター「ちいさな手」第21号 2019年11月22日発行

編集責任者：宣教主事 司祭 ペテロ 松田 浩 編集・構成：司祭 テモテ 姜 暁俊

社会委員：司祭 ダニエル 竹内 一也、トマス 吉田 仁志、エステル 近藤 順子(横浜聖アンデレ教会)、セバスチャン 染谷孝章(横浜山手聖公会)